
壊れた殺人鬼は狂(わら)い続ける

眠れる英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた殺人鬼は狂い続ける

【Nコード】

N2008Z

【作者名】

眠れる英雄

【あらすじ】

「俺には分からない。心というものが」 第四次聖杯戦争後。その時衛宮切嗣に拾われるのは、一人ではなかった。そのもう一人の少年は、心を失ってしまった。これは、『正義の味方』と相反した『殺人鬼』の物語。基本駄文なので、読みたい人だけ読んでください。批判するのでしたら、始めから読まないことをお勧めします。

プロローグ

そこにあっただのは、闇だった。

自分の周りにあるのが闇だけだと知った時、自分は死んだことを受け入れた。

光も音もない海の中に浮かんでいる。裸で、何も飾らないままで自分

……自分？

いったい、自分は誰だったのだろうか？ 僕だったのか？ 俺だったのか？ それとも私だったのか？ 自分の正体に不安を抱きながらも、ゆっくりと沈んでいく。

果てはなかった。いや、そもそも始めから墜ちてなどいなかったのかも知れない。

ここには、何も無い。

光がないのではなくて、闇さえ存在しない。何も無いから、何も見えない。墜ちていくという意味さえない。

無という言葉さえ、それには当てはまらない。

形容さえ無意味な『』の中において、自分の体だけが沈んでいく。裸のままの自分は、目を背けたくなくなるほど毒々しい色彩をしている。ここでは『ある』ものは全て毒気が強すぎるから。

「これは、何だ？」

分からない。いや、本当は分かっている。ただ理解したくない。その正体を知ってしまったら、自分は自分でいられなくなってしまっから。

怖くなった。目の前にあるものが、『』という存在に、恐怖した。自分は恐怖のあまり、一步後ろに下がった。

次の瞬間、後ろから何かに掴まれた。

「ッ!？」

驚いて後ろを振り返る。そこにあったのは、真っ黒な泥。

暗い暗い闇の中でさえ分かるほど……まるで、この世の全ての悪意で出来たような、禍々しい泥。

分かる。見ただけで分かる。

「良かった……まだ生きている」

雨が降り、全てを燃やし尽くした焼け野原で、雨と同じように涙を流す男性がいた。

名を、衛宮切嗣。第四次聖杯戦争のマスターである。

彼は今、一人の少年を抱き締めていた。この地獄の中で、生き延びてくれた生存者。

生存者である赤毛の少年の体内には、先程埋め込まれたとある『鞘』が入っていた。そのおかげで、死にかけだった少年は再び息を吹き返すことが出来た。

「早く、彼を病院……っ!!」

少年を抱き抱えた切嗣は、すぐさま少年を病院に運ぼうとしたが、次の瞬間。突如泥が地面から脇出した。

それには見覚えがあった。間違いない、これは……

「この世全ての悪……ッ！」

切嗣は苦しげな声をあげた。何故？ 何でこれがまだ存在している？ そんな疑問が彼の中を駆け巡っていく中、変化が起きた。

突如ポコポコと泡をたて始め、形が膨張し　右腕が、泥の中から飛び出してきた。

「なッ!？」

その光景に、驚きを隠せない。しかしまだまだ変化は続き、右手が縦に引き裂かれた瞬間

泥が弾け飛び、中から少年が現れた。

少し茶色に染まった短髪。身体中には泥がへばり付き、着ていた服が真っ黒になっていた。

そして何より、その瞳は……恐ろしいほど蒼く、見ているだけで何かが込み上げて来るほど美しく、そして……恐ろしかった。

数秒その少年はその姿勢のまま固まっていたが、次の瞬間、クラッと前に倒れようとした。

「　ッ!！」

その事で現実に戻ってきた切嗣は、倒れそうな少年を受け止める。

「だ、大丈夫かいッ!？」

「……………くう」

少年は寝ていた。その様子を見て生きていることを確認すると、嬉しさが込み上げてきた。

「良かった……本当に良かった……」

生きている人がいる。それが切嗣にとって、唯一の救いだっただ。

切嗣は二人の少年を抱え込むと、すぐさま病院へ走り出した。この助かった命を、死なせないために。

しかし

(……まさかこの子は、アレに耐えたと言っつのか?)

泥から出てきた少年。それはつまり、アレ 『この世全ての悪』トクソクニノアクを見て肉体を保っているということだ。

それはつまり

(……この子は、いったい何者なんだ?)

そんな不安が、切嗣の中で蠢いていた

ノイズ

” ザザー、ピーザザー ”

ノイズが走る。画像がボヤけて見える。

一番始めに見えたのは夜の景色だった。月の明かりが辺りを照らし、そこに三人の姿を写し出した。

疲れきった男性が一人、その彼と同じように月を縁側で眺めている二人の少年。

『……子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた』

ふと男性 衛宮切嗣は語り出した。まるで夢を見ているように、何処か上の空で。

『なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ』

すると赤毛の少年 土郎は、切嗣の言葉に不満を持つように頬を膨らませた。

『うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、オトナになると名乗るのが難しくなるんだ。そんなコト、もっと早くに気が付けば良かった』

その様子を見て切嗣は苦笑し、遠い月を眺める。月がとても、遠くに感じた。

『そつか。それじゃしょうがないな』

『そうだね。本当に、しょうがない』

切嗣と士郎は同じように頷く。仕方ない、だからこそ

『うん、しょうがないから俺が代わりになってやるよ』

士郎は、ごくさりげない口調で誓いを立てた。

士郎は笑い、切嗣　いや、その横にいる少年に向かって言った。

『な？　お前もそうだろ？』

……ノイズがして、名前だけ聞こえない。名前のところだけ激しくノイズが走る。

しかし、その少年には聞こえたのか。今の今まで月を見ていた茶色の髪の少年は、ゆっくりとその黒い目を向けた。

『士郎、俺を巻き込むなって。……あと爺さん、悪いけど、俺には”正義”ってものが分からない。けど、いつかその答えを見つかるよ』

少年は笑う。けど、その笑みはあまりにも人っぽくなくて、まるで人形が笑顔を作ったようだった。

けど……誰よりも、その笑顔は美しかった。

士郎もそれにつられて笑う。そして、誓いを立てる。

『爺さんはオトナだからもう無理だけど、俺なら大丈夫だろ。まかせろって、爺さんの夢は俺がちゃんと形にしてやつから』

『そうか。ああ 安心した』

最後、士郎の言葉を聞いた途端、切嗣は何かを思い出したように笑い、眠りに付いた。

一生目覚めない、永遠の眠りに

” ザザー、ピーザザー ”

また、ノイズが走る。画像がボヤけて見える。

一瞬画面が真っ暗になった後、気付けば景色が変わっていた。

そこは城だろうか？ 至るそこらに鎖が張り巡らされ、何かを封印しているように感じる。

そこに立つのは二人の青年。一人は全身黒一色の服を身に付け、目に巻かれていた包帯が首に引っ掛かっている。

その手に握られているのは一本のナイフ。そこには確かに『七夜』と書かれていた。

もう一人は茶色の髪に黒く光る黒い眼。黒のコートを身に纏い、その姿はまるで死神のようだった。

その手に握られているのは二本の剣。一つは『七夜』と書かれたナイフと同じようなナイフ。もう一本は綺麗に磨がかれた日本刀。どちらとも一目で名剣だと分かった。

『……………どうしても退いてくれないか』

『悪いな。けど、此処まで来て退くわけにもいかないんだ。殺人貴』

殺人貴　そう呼ばれた青年は、残念そうに溜め息を吐き、『七夜』と書かれたナイフを構える。

『理由はいつたい何だ？　お前みたいな奴が吸血鬼退治を目的にするわけがないよな？』

『……………探してるんだ、答えを。ずっと追い求めてきた、解答を。もしかしたら、真祖の姫君を殺せば、その答えが見付かるかもしれない』

『……………そうか、残念だよ。けど、アルクェイドは殺させない。だから、お前を殺す、』

……………また、ノイズが走る。何故かその部分だけ、音が聞こえない。

それを聞いて青年は、首を横に振る。

『……違うよ、殺人貴。俺はそんなんじゃない、俺は、アンタみたいにはなれない』

そう告げながら、青年は目を瞑り 次の瞬間、目の色が、黒から蒼色に染まる。

『……一つだけ、いいか？』

『……なんだ？』

お互い剣を構え、足腰に力を込める。後は突っ込むだけ。その瞬間を、今か今かと待ち望む。

『 どうして君は、その世界に耐えられたんだい？』

『……そんなの、決まってるでしょうが』

青年は思わず自虐的な笑みを浮かべた。

何故、耐えられたかって？ そんなの

『 最初から壊れているのに、何に耐えると言っんですか』

次の瞬間 死と死のぶつかり合いが始まった

” ザザー、ピーザザー ”

また、ノイズが走る。画像がボヤけて見える。

一瞬画面が真っ暗になった後、気付けば景色が変わっていた。

次に写ったのは戦場。真っ赤に燃える夕焼けに照らされて、二人の青年が立っていた。

一人は白髪とは対極な褐色の肌に、赤と黒のコートを見に付けている。

その手に握られている二本の双剣。干将と莫耶と呼ばれる夫婦剣が、血が出るほど握り締められていた。

『何故だ……何故このようなことをした、 ツ! !』

その表情は怒りに包まれており、まるで射殺すような鷹の目でそいつを睨み付ける。

『……何か用か? 士郎』

その声の持ち主は、何時もと変わらぬ様子で褐色の青年に話しかけた。

……足下に、大量の死体を撒き散らして。

青年の蒼い瞳が、鷹の目と重なり合う。その手に握られた二本のナイフと日本刀が、血に染まっている。

『何故だ！？ 彼らは何の罪もない一般人なはず！ それなのに、何故貴様は殺したッ！？』

『……勘違いするなよ”鋼鉄の英雄”。俺はお前とは違う。俺はただ、答えを見付けていないんだ』

『答え……だと……？』

『そうだ。あの日、”正義の味方”が誓ったように、俺もまた答えを追い求めている。俺はまだ、答えを見付けていないんだ』

青年は構える。二本の剣を褐色の青年に向け、告げる。

『……俺は、その答えを見付けるまで殺し尽くす。それが俺”この世全ての悪”^{アンリ}のだから。さあ士郎、俺を殺さなきゃ、更に被害が増えるぜ？ どうするんだ？”正義の味方”？』

『くっ！ やるしかないのか……ッ！』

褐色の青年は苦しそうに声をあげる。けど、それでも彼は剣を青年に向けた。

何故なら……彼は、『正義の味方』なのだから。

『行くぞ……』

ツ!!!』

『来いよ……正義の味方』

ツ!!!』

二人は叫ぶように走り出し

剣と剣が、火花を散らした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2008z/>

壊れた殺人鬼は狂（わら）い続ける

2011年12月7日07時45分発行